

教育の「土台」としての宗教・文化

渡辺海旭から、柴田徳次郎および長谷川良信に受け継がれたもの



菊池 結

はじめに

現代において、大学教育の場においても、社会福祉においても、方法論が重視され、本質論が軽視されているように感ずる。しかし、渡辺・長谷川・柴田に通じる脈筋は、必ずしもそうではない。

本論文の目的は、一つはこれまで触れられることのないかった仏教社会事業家の嚆矢である渡辺海旭¹、淑徳大学の創設者であり、宗教と社会事業と教育の三位一体論を唱えた長谷川良信²、国士館の創立者である柴田徳次郎のつながりを発見することである。もう一つは、同時期に論じられた福祉や教育の「土台」として仏教に役割が与えられたことを考察することである。渡辺と長谷川は浄

土宗の僧侶であるが、柴田は、必ずしも仏教徒であると位置づけられていない。しかし柴田は、日本が明治維新後、西洋文明を積極的に受容し、社会の近代化を急速に推進するなかで、伝統文化を破壊し、軽視することに憂いを感じていた。そして柴田とその有志たちは、日本の「革新」をはからんと、「社会改良」と「青年指導」を目的として「青年大民団」を組織し、一九一七（大正六）年に、「活学を講ず」の宣言とともに、私塾「国士館」を創設した。「国士館創設趣旨」で謳われているのは、吉田松陰の精神を範とし、日々の「実践」のなかから心身の鍛錬と人格の陶冶をはかり、国家社会に貢献する智力と胆力を備えた人材を養成することにあった。

すでに述べたように日本が明治維新後、西洋文明を積極的に受容するなかで、渡辺・長谷川・柴田らは、日本

的な道徳として、さらには教育などを支える精神的なよ
りどころとして、仏教の重要性を主張したと考えられ
る。彼らのなかで、欧米諸国のキリスト教的な思想体系
と、日本古来の仏教的なものとの考え方という二つの対抗
軸があったと考えられる。

一 日本の仏教教育

日本の仏教教育は、日本天台宗の開祖・最澄（七六七
—八二二）の山家学生式あるいは空海（七七四—
八三五）の綜芸種智院から語られることが多い。現在で
も、日本の仏教系大学は数多くある。「仏教系大学会議」
という組織も存在し、同会議は建学の理念を仏教におく
全国の仏教系大学（短期大学を含む）が、それぞれの個
性を尊重しつつ各大学間の連携を密にし、もって各大学
の充実発展をはかるとともに高等教育機関としての社会
的責務を遂行することを目的とし、一九九四（平成六）
年に設立された。仏教系大学会議加盟校は、以下の通り
である（二〇一六年現在）。

愛知学院大学
愛知学院大学短期大学部
足利工業大学

足利短期大学
大阪大谷大学
大谷大学・大谷大学短期大学部
九州大谷短期大学
岐阜聖徳学園大学・岐阜聖徳学園大学短期大学部
京都華頂大学
華頂短期大学
京都光華女子大学・京都光華女子大学短期大学部
京都嵯峨芸術大学
京都嵯峨芸術大学短期大学部
京都女子大学
京都文教大学
京都文教短期大学
くらしき作陽大学
高野山大学
こども教育宝仙大学
駒沢女子大学・駒沢女子短期大学
駒澤大学
埼玉工業大学
札幌大谷大学・札幌大谷大学短期大学部
四天王寺大学・四天王寺大学短期大学部
淑徳大学

淑徳短期大学
種智院大学
相愛大学
大正大学
筑紫女学園大学・筑紫女学園大学短期大学部
鶴見大学・鶴見大学短期大学部
東海学園大学
同朋大学
東北福祉大学
苫小牧駒澤大学
名古屋音楽大学
名古屋造形大学
花園大学
兵庫大学・兵庫大学短期大学部
佛教大学
身延山大学
武蔵野大学
立正大学
龍谷大学・龍谷大学短期大学部
飯田女子短期大学
大阪千代田短期大学
帯広大谷短期大学

京都西山短期大学
正眼短期大学
聖和学園短期大学
高田短期大学
東京立正短期大学
函館大谷短期大学
余談だが、日本仏教社会福祉学会の団体会員（大学・短期大学以外も含む）は、叡山学院、大谷大学、京都文京短期大学、高野山大学、駒沢大学、札幌大谷大学・札幌大谷短期大学部、淑徳短期大学、淑徳大学、種智院大学、浄土真宗本願寺派社会福祉推進協議会、真宗大谷派宗務所教育部、浅草寺、増上寺、大正大学、知恩院、筑紫女学園大学、同朋大学、東北福祉大学、日蓮宗現代宗教研究所、花園大学社会福祉学部、佛教大学、身延山大学、立正大学社会福祉学部、龍谷大学である（二〇一四年現在）。

二 道徳と教育（明治から大正、昭和初期にかけて）

日本では一八七二（明治五）年の学制以後、初等教育の義務就学の方策がとられ、一八八六（明治一九年）の小学校令では明確に尋常小学校四年間の就学を父母・後

見人などの義務と定めた。その後一九〇七（明治四〇）年に義務教育修学年限を二年延長して六年とした。井上哲次郎も一九一二（大正元）年、国民教育は「小学校から中学校及び中学程度の教育を込めて云ふのでありまして、これは国民として必ず受けて置かんければならぬ教育」^③であると述べ、いわゆる義務教育をもって国民教育と考えられるようになる。

それとともに国民道徳も学校中心となり、第一期小教則時代（明治初年から一二、三年ごろ）、第二期小教則綱領時代（明治一四年頃より二二年頃）、第三期改正小学校令時代（明治二三年頃より三六年頃）、第四期国定修身書時代（明治三七年以降）とされる。^④

第一期は外国の修身書を教科書または参考書とし、第二期は儒教による修身教授が行われ、第三期は教育勅語による徳目が教えられ、第四期は物語を基本として徳目、人物を配したものとなっている。

一八九〇（明治二三）年一〇月三〇日には、国民道徳の基本を示し、教育の得本理念を明らかにするために、教育勅語が公布された。政府は勅語の謄本を全国の学校に配布し、天皇、皇后の写真の礼拝と勅語奉読を核とする学校儀式を案出し推奨した。この頃、三教合同、神道優先、教育勅語の国民道徳のもとで、仏教界も勅語への

歩みよりと仏教人生論により生涯教育化、国民道徳化を促むこととなる。

また、大正期から昭和期にかけ、教育界に宗教教育の必要性が叫ばれ、一九二五（大正一四）年には宗教教育叢書が刊行され、日曜学校協会から月刊「宗教教育」が刊行されるに至った。大正中期には、全国小学校教員大会でも、全国高等女学校長会でも、高等師範学校長会でも、全国師範学校長会議でも、宗教の必要性が叫ばれて、全国師範学校長会議では、宗教教育を教科のなかに取り入れることを決議した。これは道徳教育の不徹底を、宗教情操教育という形で補うということが主となっている。^⑤

三 渡辺海旭の教育論^⑥

次に渡辺らの教育論についてみていく。長上深雪は、仏教社会福祉の特徴は「目に見える活動の姿にはなく、実践を支える仏教精神にある」と述べる^⑦。同様に、渡辺らの教育論は、教育を支える土台となるのが仏教であると論じている。以下、それぞれの教育論について述べる。渡辺らの教育論の根底にある基本的精神は、大乘仏教の精神である。

1. 誕生と家庭環境

渡辺海旭は、一八七二（明治五）年一月一日、東京市浅草区田原町三丁目一番地に父・啓蔵、母・と奈の長男として誕生した。幼名は芳蔵である。

父の啓蔵は東京小伝馬町の「まごめ」の番頭をしてい
たらしいが、生活は相当に困窮していたことが伝えられ
ている。経済的な理由のためか、一八八一（明治一四）
年、渡辺が九歳のときに抜嫡のための改名届を提出、翌
年一月一九日に許可されている。このとき浅草にある
「満照寺」に入寺したといわれているが、この満照寺に
いた期間は短く、一八八四（明治一七）年には寺をで
て、博文館の小店員となっている。

しかし満照寺の住職と東京・小石川の源覚寺の端山海
定（西光寺前住職）とが懇意だったことから、一四歳で
端山海定について得度を受けている。出家した動機やそ
のきっかけについては明らかではないが、当時渡辺家は
経済的に困窮しており、なにか経済的理由によるもので
あったと考えられている。渡辺海旭論文集『壺月全集』
下巻の「伝記」には、「偶々、頓悟の質を當時小石川浄
土宗源覚寺に在りし西光寺前住職端山海定和尚に見出さ
れ、一四歳にして和尚の室に入り薙髮得度す」とある。

2. 青年期の学び

幼少の頃から聡明であった渡辺は、一八八七（明治
二〇）年、一五歳で浄土宗第一教校（現芝中学高等学
校）に入学する。その後、浄土宗学本校に進み、高等予
科と高等本科の全科を修め、一八九五（明治二八）年、
学年第二位の優秀な成績で卒業している。学友には、望
月信亨（一八六九—一九四八）や荻原雲来がいる。高等
予科では宗余乗学、哲学、国語、漢文、英語、羅甸、数
学、地理、歴史、博物、理財学などを学び、高等本科で
は俱舎、唯識、華嚴、天台の専門分野があり、渡辺は、
俱舎部を卒業している。この在学中に、西欧の仏教研究
にも注目し、ドイツの研究者の文献をもとに『西蔵仏教
一班』（一八九五年）を研究し発表している。

卒業後すぐに、関東各県下浄土宗寺院連合第一教校教
諭を任命される。また、『浄土教報』の主筆に就任して
いる。その他、浄土宗内地留学生に任命され、三年間比
較宗教学を学んでいる。一八九八（明治三一）年には、
師僧の海定が隠退したため、その後を継いで西光寺の住
職となる。また、革新的な仏教改革を目指した「仏教清
徒同志会」（後の新仏教徒同志会）の設立に参加するな
ど、活発な活動をみせている。

3. ドイツ留学

渡辺は、一九〇〇（明治三三）年五月五日、浄土宗第一期海外留学生として、ドイツのストラスブルク大学に留学し、E・ロイマン教授 (Leumam, Ernst, 1859-1931) に師事している。そこで、パリ語、サンスクリット語を学習し、それらによる比較研究に取り組んでいる。一九〇七（明治四〇）年、『普賢行願讃』の研究で、ドクトル・フィロソフィーの学位を取得している。

一方で、欧米の社会や宗教情勢を視察している。「日想観樓雜感」（浄土教報四三三号）には、「日本の今日より将来を推すと、どうしても吾党の士が一肌ぬいで、社会が健全の発育を遂げる為国家に報効（ママ）する為、是非とも社会事業や、慈善事業に眼をつけて頂かねはならない」と書いている。一九一〇（明治四三）年に、帰国すると、ただちに宗教大学（現大正大学）、東洋大学の教授となる。また、正式に『浄土教報』の主筆にも復帰する。

4. 仏教社会事業家へ

ドイツ留学中に暖めていた考えを実践するように、帰国翌年の一九一一（明治四四）年、「浄土宗労働共済会」を設立する。また、一九一二（明治四五）年五月には、

研究機関である仏教徒社会事業研究会を主催する。一九一八（大正七）年五月には、宗教大学社会事業研究室の開設に尽力している。

5. 渡辺の教育論

渡辺は、芝中学校校長（一九一一年九月就任、以後死去までの二〇余年間勤める）などを務め、多くの教育事業に携わっている。彼の教育論の一つに、「四つのL」がある。四つのLとは、Lのことであり、Lは四つのLが上下左右に組み合わされて成り立つており、渡辺は四つのLとは「Light, Love, Life, Liberty」である。光明と、愛と生命と自由は現代人の理想としてまた生活として誰とて是認せぬものはあるまい。また仏教といひ基督教といひ神道といひ、何れの宗教、何れの教養に於ても此四つを主眼とせぬものはない。L字が仏教の代表記号として適当であることは勿論、広く各宗教を通して之を標示としても差支えない」と述べている。

四 長谷川良信の教育論

1. 誕生と家庭環境

長谷川良信は、一八九〇（明治二三）年一〇月一二

日、茨城県西茨城郡南山内村字本戸（現笠間市内）に生まれる。六歳で浄土宗・得生寺の住職小池智誠の養子となる。一五歳で上京し、浄土宗第一教校（現芝中学高等学校）に入学する。一九一〇（明治四三）年に、浄土宗第一教校を卒業し、宗教大学（現大正大学）に進学する。在学時より生涯の師である渡辺海旭や矢吹慶輝と知り合う。

宗教大学卒業後に、渡辺の薦めもあり、東京市養育院の巢鴨分院（現石神井学園）に勤務するが、病気により退職する。その後、『浄土教報』の記者として再出発し、宗教大学に「社会事業科」の開設を訴えるなど、再び活動を始める。一九一八（大正七）年に、東京府慈善協会の救済委員制度が創設されるに伴い、長谷川は、巢鴨方面の救済委員を委託される。徹底した調査のなかで、個人としての活動よりも、組織的な事業の必要性を痛感し、西巢鴨にある通称「二百軒長屋」に、「マハヤナ学園」（一九一九年）を創設した。長谷川が、若年二八歳でマハヤナ学園を創設するとき、創立委員に柴田徳次郎も名を連ねている。国士的な豪傑さと、日本的な精神を重視する点は、渡辺・柴田・長谷川の三者に共通する。

2. 宗教・社会事業・教育の三位一体論

長谷川は、宗教・社会事業・教育の三位一体論を提唱した。三位一体は、通常はキリスト教で、父・子・精霊の三位は唯一の神が三つの姿となって現れたもので、元は一体であるとする教理のことを指す。転じて、三つの異なるものが一つになること、また三者が心を合わせることを意味する。また、代表的な著書である『社会事業とは何ぞや』のなかで、長谷川は、「社会事業とは社会の進歩人類の福祉の為に社会的疾病を治療し社会の精神的関係及経済的關係を調節する機能をいふ―定義」と述べている。⁹⁾

3. 長谷川 of 教育論

一九一八（大正七）年に創設された「マハヤナ学園」は、「社会福祉法人マハヤナ学園」として、二〇一〇（平成二二）年に創立九〇周年を迎えた。また、教育事業としては、淑徳大学が昨年（二〇一五年）創立五〇周年を迎えている。淑徳大学は、大乘仏教の理念を建学の精神としており、長谷川は、「For him（彼のために）ではなく、together with him（彼と共に）でなければならぬ」と述べている。一九六五（昭和四〇）年に、社会福祉学部社会福祉学科から始められた淑徳大学は、

「together with him」の実践を通じての理想社会の建設と真実な人間の育成」を目指すものとしている。それらは、仏教でいう自利利他の精神であり、今日の「共生」の思想といえる。

五 柴田徳次郎の教育論

1. 誕生と家庭環境

柴田は、一八九〇（明治二三）年二月二〇日、福岡県那珂郡別所村（現筑紫郡那珂川町別所）に生まれる。一四歳で上京し、苦学の末に早稲田大学専門部を卒業。在学時より同郷の頭山満、野田卯太郎らと知り合う。一九一七（大正六）年十一月、二六歳で同志とともに国士館を創設した。国士館は、現在では中学・高校・大学・大学院を一貫する学校法人国士館となっている。建学の精神は、「日本の将来を担う、国家の柱石たるべき眞智識者「国士」を養成する」である。

2. 柴田の教育論

『大民』大正六年十一月号に、宣言「活学を講ず」が巻頭に掲げられた。以来、国士館はこの「活学」を教学の理念とし、学ぶ者みずからが不断の「読書・体験・反

省」の三綱領を実践しつつ、「誠意・勤労・見識・気魄」の四徳目を涵養することを教育指針に掲げてきた。¹⁰この「活学を講ず」は、「国士館設立趣旨」として、新たな教育機関の設立を世に訴える宣言文となった。注目すべきは、「精神文明なくして国家豈に一日の安きを得んや」と高らかに謳い、「活学を講ず」ではさらには、昨今の日本文化のありようを「猿真似の文化」であると批判している。このような柴田らの思いが国士館と渡辺・長谷川らとの結びつきとなったのではないかと考えられる。

六 柴田徳次郎と国士館

—— 渡辺海旭との関係について ——

本節においては、柴田徳次郎が仏教者である渡辺海旭に「思想問題」の授業を依頼した経緯について述べる。資料は、主に青年大民団の機関紙『大民』を使用する（資料1）。これまでに、柴田と渡辺の関係を指摘した例はほとんどない。渡辺海旭研究では、「国士館完成長老懇談会記念写真」として、柴田、渡辺、徳富蘇峰、渋沢栄一、野田卯太郎、頭山満らとともに写された写真が現存しているが（資料2）、どういう経緯で撮影されたのかは不明であった。これまで指摘されたことのない、柴田と渡辺との接点を述べるだけでも価値はあると思う。

資料1 現存する『大民』一覽(二〇一三年現在)

第1巻第1号	大正5年6月15日発行	第4巻第4号	大正8年4月1日発行	第7巻第7号	大正10年7月1日発行
欠		第4巻第5号	大正8年5月1日発行	第7巻第8号	大正10年8月1日発行
第2巻第3号	大正6年3月10日発行	第4巻第6号	大正8年6月1日発行	欠	
第2巻第4号	大正6年4月1日発行	第4巻第7号	大正8年7月1日発行	欠	
第2巻第5号	大正6年5月1日発行	第4巻第8号	大正8年8月1日発行	欠	
第2巻第6号	大正6年6月1日発行	第4巻第9号	大正8年9月1日発行	欠	
第2巻第7号	大正6年7月1日発行	第5巻第1号	大正8年10月20日発行	欠	
第2巻第8号	大正6年8月1日発行	第5巻第2号	大正8年11月1日発行	欠	
第2巻第9号	大正6年9月1日発行	第5巻第3号	大正8年12月1日発行	欠	
第2巻第10号	大正6年10月1日発行	第6巻第1号	大正9年1月1日発行	第8巻第4号	大正11年4月1日発行
第2巻第11号	大正6年11月1日発行	第6巻第2号	大正9年2月1日発行	第8巻第5号	大正11年5月1日発行
第2巻第12号	大正6年12月1日発行	第6巻第3号	大正9年3月1日発行	第8巻第6号	大正11年6月1日発行
第3巻第1号	大正7年1月1日発行	第6巻第4号	大正9年4月1日発行	欠	
第3巻第2号	大正7年2月1日発行	第6巻第5号	大正9年5月1日発行	第8巻第8号	大正11年8月1日発行
欠		第6巻第6号	大正9年6月1日発行	第8巻第9号	大正11年9月1日発行
第3巻第4号	大正7年4月1日発行	欠		第8巻第10号	大正11年10月1日発行
第3巻第5号	大正7年5月1日発行	欠		第8巻第11号	大正11年11月1日発行
欠		第6巻第10号	大正9年10月1日発行	第8巻第12号	大正11年12月1日発行
第3巻第8号	大正7年8月1日発行	第6巻第11号	大正9年11月1日発行	欠	
欠		第6巻第12号	大正9年12月1日発行	欠	
第3巻第10号	大正7年10月1日発行	欠		欠	
第3巻第11号	大正7年11月1日発行	第7巻第2号	大正10年2月1日発行	第9巻第5号	大正12年5月1日発行
欠		第7巻第3号	大正10年3月1日発行	第9巻第6号	大正12年6月1日発行
第4巻第1号	大正8年1月1日発行	第7巻第4号	大正10年4月1日発行	第9巻第7号	大正12年7月1日発行
第4巻第2号	大正8年2月1日発行	第7巻第5号	大正10年5月1日発行	第9巻第8号	大正12年8月1日発行
第4巻第3号	大正8年3月1日発行	第7巻第6号	大正10年6月1日発行		

筆者は、柴田が、渡辺に道徳のよりどころとしての仏教（あるいは宗教一般）を教えるよう依頼したのではないかと推測している。特に、一九二三（大正一二）年に、大民倶楽部が「佛教各宗派聯合海外布教団」の発会を図るなどは、仏教各宗の連携と大乘仏教を土台にした社会問題への取り組みという渡辺の思想の影響を受けているといってもよい。

柴田は、芝中学校で、渡辺の修身の授業を受けたことがあるともいわれている。¹² 芝中学校で、渡辺の「修身」の授業を受けた柴田が、その人柄に感服し、関係が繋がったのではないかと考えられる。そして、もう一人、柴田と渡辺の接点を考えるにあたって重要な人物がいる。それは、渡辺の弟子であり、マハヤナ学園の設立者である長谷川良信である。柴田と長谷川は、共に後に渡辺が校長を務めることになる芝中学校の学友であり、「二人で社会国家を論じたり、酒を酌み交わしたりしていた¹³」という。しかし、同様に、これまで国士館や柴田と長谷川のつながりを指摘するものはほばない。

1. 柴田徳次郎と渡辺海旭との接点

柴田は、芝中学校で、渡辺の修身の授業を受けたことがあるともいわれているが、これまで、柴田と、浄土宗



1926（大正15）年6月3日 国士館長老懇談会（於渋沢栄一郎）

（前列左より頭山満、野田卯太郎、渋沢栄一、徳富猪一郎（蘇峰）、後列左より花田半助、渡辺海旭、柴田徳次郎）

僧侶であり仏教社会事業家である渡辺との関係を指摘するものは少ない。

ここでは、まず渡辺と、頭山満や徳富蘇峰らとの関係を挙げておく。渡辺の甥である作家の武田泰淳は、渡辺が晩年に頭山や徳富らとのグループと付き合ったのは失敗であったと述べている¹⁴。渡辺が彼らといつ交際をはじめ、どのような影響を受けたのかを明確にすることは、今後の渡辺海旭研究の課題だと思われる。なぜならば、太平洋戦争中の植民地政策と、植民地での仏教者の社会事業とがある種の密接な関係にあることがしばしば指摘され始めているからである。しかし、ここでは本論文の論旨から外れるため述べない。渡辺と頭山、徳富らとの接点は二つある。

ひとつは、すでに述べたように、一九二六（大正一五）年に「国士館完成長老懇談会記念写真」として、頭山や徳富と一緒に写る渡辺の写真がある（『壺月全集』下巻には、この写真は、私塾國士館の設立を協議する有志として、一九一六（大正五）年のものとして収載されているが、甥の泰淳が四四歳の渡辺を晩年というのはいささか若すぎる気がするので、年号の誤りであろう）。

ふたつめは、新宿中村屋の相馬夫妻とボース¹⁵、それと頭山との関係からの接点である。新宿中村屋の相馬夫妻

は、長女俊子の死をきっかけにして、渡辺の信奉者となったことは有名な話である。特に、妻の黒光は、壺月会という渡辺の法話会を主催するほどであった。ボースとは、中村屋のボースとして日本に初めてインドカレーを伝えたインド独立運動の指導者のラス・ビハリ・ボースのことである。ボースは、一九一五（大正四）年にイギリスの追及を逃れて訪日し、頭山満の支援を受け、新宿中村屋の相馬夫妻の自宅に匿われることになった。その後、相馬夫妻の長女敏子と結婚したが、敏子は一九二五（大正一四）年に亡くなっている。相馬愛蔵は、渡辺の哀悼文のなかで、「私の婿のボースの處へ、三周忌の墓参りに行きました。頭山翁と先生とは初対面でした」と書いている。したがって、愛蔵のいう三周忌とは、一九二七（昭和二）年のことであろう。この時点で渡辺は、五五歳を迎えている。渡辺は、太平洋戦争を迎える前の一九三三（昭和八）年一月五日に六一歳で敗血症により逝去している。

そうすると、愛蔵の記憶違いという可能性もあるが、柴田と渡辺との出会いはそれよりも遥かに早いことになる。次に、柴田と渡辺との接点をみていく。柴田が上京し、渡辺が死去するまでの、彼らの接点を年表にすると左の通りになる。

一九〇五（明治三八）年上京。

一九〇七（明治四〇）年東京市・芝中学校第三学年に入学。（一九〇八（明治四一）年三月同校全科卒業）。

※一九一〇（明治四三）年渡辺海旭芝中学校長就任。

一九一二（大正元）年早稲田大学政治経済学科（専門部）に入学。（一九一五（大正四）年七月同校全科卒業）。

一九一三（大正二）年「青年大民団」結成。

一九一六（大正五）年機関誌『大民』創刊。

一九一七（大正六）年麻布区麻布笄町（現西麻布、ごく一部は南青山）に、私塾「國士館」を設立。

日・祭日を除き夜七時から九時まで、政治・経済・社会・宗教・哲学・武道などのほか、外国語を教える。

※臨時補講として、渡辺海旭「思想問題」を教える。

一九一九（大正八）年財団法人国士館を設立。

※財団法人国士館の理事に、渡辺海旭就任。

一九一九（大正八）年松陰神社隣接地（現世田谷キャンパス）に移転、国士館高等部設置。（昭和五年三月廃止）。

一九二六（大正一五）年国士館完成長老懇談会を開

催。

※渡辺海旭、徳富蘇峰、渋沢栄一、野田卯太郎、頭山満らとともに写した写真が現存（前掲した資料②）。

一九二三（大正一二）年国士館中等部設置。（一九二五（大正一四）年三月廃止）。

一九二五（大正一四）年国士館中学校設置。（一九四九（昭和二四）年三月廃止）。

一九二六（大正一五）年荏原郡西部六町村合同経営の国士館商業学校設置。（一九四九（昭和二四）年三月廃止）。

一九二九（昭和四）年国士館専門学校設置。（一九五五（昭和三〇）年三月廃止）。

一九三〇（昭和五）年国士館高等拓植学校設置。（一九三四（昭和九）年一月廃止）。

一九三二（昭和七）年満洲鏡泊湖畔に鏡泊学園を設置。

※鏡泊学園総長に、渡辺海旭就任。

※一九三三（昭和八）年渡辺海旭死去。

このように、柴田と渡辺の出会い、少なくとも一九一七（大正六）年の国士館設立以前であることが分かる。しかし、柴田が芝中学校に入学したとされる

一九〇七（明治四〇）年は、渡辺は、ドイツ留学期間であり、柴田の学友であった長谷川が紹介したのだろうという推測の域をでない。

2. 国士館担当課目について

しかし、前述のとおり、渡辺は、財団法人国士館の理事や、渋沢栄一郎で行われた国士館長老懇談会に、頭山や野田らと同席するなど、相談役としてかなりの位置にいたと考えてよい。¹⁶ 本節では、『大民』に書かれているものを中心に、渡辺が担当した科目を記述する。

これらを見るかぎり、渡辺に期待されたのは、「修身」や「思想問題」である。仏教者である渡辺に、思想問題の授業を担当させたのは、設立趣旨の冒頭にあるように¹⁷、当時の「唯だ科学智を重んじて、徳性涵養を忘る」教育に対する反旗であったと考えられる。これは、「宗教・社会事業・教育の三位一体」を唱えた長谷川にも共通する考え方であり、一方で、教育なり、社会事業があり、一方でそれを精神面で支える、強化する、より良いものにする、または日本的なものにする、大乘仏教の思想があるとするのである。この点において、仏教思想とは、社会的なものを内面的な精神として支えるという役割を与えられるのである。また、柴田は、母親がかなり

の信仰心に篤い女性であつたらしく、その影響は小さくはないと述べている。『大民』をみるかぎり、渡辺の担当課目は以下のようなものである。

一、『大民』三卷二号大正七年二月一日「国士館設立趣旨」講師 芝中学校 渡辺海旭 補教として 思想問題。

二、『大民』三卷一号大正七年一月「国士館講座一月分」佛教哲学 椎尾弁匡 社会問題 長谷川良信。

三、『大民』三卷五号大正七年五月一日 補教として 思想問題 渡辺海旭。

四、『大民』三卷八号大正七年八月一日「国士館移設趣旨」補教として 思想問題 渡辺海旭。

五、『大民』三卷一〇号大正七年一〇月一日「国士館講座九月分」思想問題 渡辺海旭。

六、『大民』五卷一号大正八年一〇月二〇日「一週間に於ける学科の配当左の如し」宗教 渡辺先生。

七、「国士館規則（高等部）」「一週間に於ける学科の配当左の如し」宗教 渡辺海旭。

八、『大民』六卷五号大正九年五月一日「国士館第一期に於ける一週間の学科配当左の如し」仏教史上に現はれたる東洋思想（二時間）渡辺先生。

九、『大民』七巻四号大正一〇年四月一日 宗教（火、

二時間）渡辺先生 社会学及社会問題（水、二時間）
長谷川先生。

一〇、『大民』八巻九号大正一一年九月一日「国士館夏
期講習会記事」第一期 宗教心に就いて ドクトル
渡辺海旭 第三期 宗教に就いて ドクトル 渡辺海
旭。

一一、大正一二年三月三〇日から四月四日「国士館春季
講習会開催」思想問題に就いて 渡辺海旭。

一二、『大民』一〇巻八号大正一二年八月一日 東京在
住の佛教各宗派の僧侶と会談し、佛教各宗派連合海外
普教団の発会を図る。

一三、大正一四年夏（発行日付なし）国士館要覧「国士
館専門部組織」哲学 ドクトルフィロソフイエ 渡
辺海旭 社会問題 マハヤナ学園 長谷川良信 「中
学校」講師 倫理 芝中学校 ドクトルフィロソ
フイエ 渡辺海旭。

一四、大正一四年八月二六日から二〇日「国士館第四回
夏季講座」一七日 世界列国の社会事業に就いて
長谷川良信、二〇日 補講 渡辺海旭。

一五、大正一四年一二月二日から五日「興国青年大演習
開催」講師 渡辺海旭。

一六、昭和四年三月一日「文部省国士館専門学校設置
許可」修身 渡辺海旭。

その他に、『大民』には、大正一一から国士館学長を
務めた長瀬鳳輔の国士館々葬や、野田卯太郎追悼会にお
いて、渡辺が導師を務めたことが報じられている。

おわりに

以上、渡辺に影響を受けた柴田と長谷川の社会事業お
よび教育事業について述べてきた。そこから明らかにな
るとは、欧米諸国の近代社会事業あるいは教育事業を学ん
だ彼らが、それぞれに仏教に精神的な重要性を見出して
いることである。

また、これまでに、渡辺と柴田あるいは柴田と長谷川
との関係を指摘されることはまれであった。しかし、こ
のように彼らの思想は、仏教は社会事業と教育事業を支
える重要な精神的基盤であるという点で共通する。日本
は、明治維新後、西洋文明を積極的に受容した。彼ら
は、仏教的な慈悲業や、慈善ではない近代社会事業など
を学び、吸収し、日本的な土壌のなかでそれを解釈した
のである。

註

- (1) (2) 渡辺や長谷川に関する文献は多い、例えば、次のものがある。芹川博通『渡辺海旭研究 その思想と行動』（大東出版社、一九七八年）、長谷川匡俊『長谷川良信』（シリーズ福祉に生きる／24）（大空社、二〇一五年）、『仏教と社会事業と教育と長谷川良信の世界』（長谷川仏教文化研究所、一九八三年）。
- (3) 井上哲次郎『国民道徳概論』（三省堂、一九二二年）付録二九頁。
- (4) (5) 齊藤昭俊『仏教教育論集』（仏教教育研究所、二〇〇九年）、齊藤昭俊『仏教教育選集Ⅰ 慈悲の教育』（国書刊行会、二〇一一年）、斎藤昭俊『近代仏教教育史』（国書刊行会、一九七五年）。
- (6) 渡辺の教育に関する論考に、次のものがある。「漫言教則―米峰―への私信」（『新仏教』一〇巻六号、一九〇九年）、「女子教育機関の充実を計れ」（『浄土教報』一三五七号、一九一九年）、「中等教育私見」（『浄土教報』一三八三号、一九一九年）、「教育の欠陥とその責任者」（『浄土教報』一二一三号、一九一六年）、「教育界の醜状」（『浄土教報』一五〇〇号、一九二二年）。
- (7) 日本仏教社会福祉学会編『仏教社会福祉入門』（法藏館、二〇一四年）一三頁。
- (8) 『壺月全集』（壺月全集刊行会、昭和八年改訂版、一九七七年）三七〇頁〜三七三頁。
- (9) 長谷川良信『社会事業とは何ぞや』、『長谷川全集』上巻、二二六七頁。
- (10) 『国士館九十年』（学校法人国士館、二〇〇七年）。
- (11) 浄土宗第一教校は、一九〇六（明治三九）年に「男子に須要なる高等普通教育を為すを以て目的とす」として、宗門外の一一般子弟の教育に門戸を開放。私立芝中学校となる。初代校長に松濤賢定就任。一九一一（明治四四）年、第三代校長に渡邊海旭就任。
- (12) 国士館中学校設置認可申請書。一九二五（大正一四）年三月三〇日に添付された柴田の履歴には、一九〇七（明治四〇）年四月東京市芝区私立芝中学校第三学年へ入学、一九一二（大正元）年九月一日早稲田大学政治経済科（専門部）へ入学、一九一五（大正四）年七月同校全科卒業とある。
- (13) 長谷川匡俊『シリーズ福祉に生きる 長谷川良信』（大空社、二〇〇五年）一二二頁。
- (14) 吉田久一『著作集二』（川島書店、一九九三年）に

著者（吉田）宛の武田泰淳氏の書簡が採録されている。

- (15) 相馬愛蔵・黒光。相馬夫妻は、東京本郷に小さなパン屋中村屋を開業、一九〇四（明治三七）年にはクリームパンを発明した。一九〇七（明治四〇）年には新宿へ移転、一九〇九（明治四二）年には現在地に開店した。中華饅頭、月餅、インド式カリー等新製品の考案、喫茶部の新設など本業に勤しむ一方で、絵画、文学等のサロンをつくり、荻原礫山、中村彝、高村光太郎、戸張弧雁、木下尚江、松井須磨子、会津八一らに交流の場を提供し、「中村屋サロン」と呼ばれた。

- (16) 国士館設立趣意書（一九一七年）の「先生及講座時間」によると、すでに渡辺は、思想問題の臨時講話を担当している。一九一九（大正八）年の国士館落成式および開会式では、芝中学校校長として、渡辺は祝辞を述べている。また、一九二一（大正一〇）年七月に、創設された「財団法人国士館維持会」に名前は見当たらないものの、同年築地精養軒で行われた「国士館相談会」に撮影された写真に、渡辺の姿が写っている。

- (17) 国士館の設立趣旨冒頭は、このように述べられている。

る。「物質文明の弊日に甚だしく、人は唯だ科学智を重んじて、徳性涵養を忘る今日に於て教育とは唯だ科学智の売買たるのみ此の如きは唯だ物質文明に終る、精神文明なくして国家豈に一日の安きを得んや、蓋し精神文明は物質文明を統一指導するものなり」。